

## [特別講演 I]

## 祖父・富士川游のこと

富士川義之

東京大学名誉教授／英文学者

## はじめに

わたしは祖父・游が医史学、父英郎がドイツ文学を専門とする学者の家に生まれ育った。わたしも英文学者の端くれであるから、それぞれ専門を異にしながらも、学者が3代続いたことになる。3代続くのは珍しいと人に言われたことが何度かあるが、この講演では、医史学者富士川游が成し遂げた仕事と彼の生涯について、孫として、と言うよりもむしろ、一介の素人の読者の立場から、幾つか自分にとって重要と思われる事柄にしぼって手短かにお話しできたらと願っている。

祖父・游は、わたしが2歳のときに他界している。当然わたしの記憶にはない。ただ名付け親ではあるし、父がときどき言葉少なく語る祖父の話には子供の頃からいつも聞き耳を立てていた。わたしは折にふれて祖父への敬慕の念をもらす父親のもとで育ったのである。客間には祖父の著作が書棚の目立つところに置いてあって眼に触れる。壁には祖父の書の掛け軸がいつも掛かっていたし、棚の上には晩年の祖父の写真が飾られていた。父の話をもとに受けとめて、学者としても、人間としても偉い人であるという漠然としたイメージが、いつの間にかわたしの内部に刷りこまれたのは、自然の成行きであつたらう。振り返ってみると、イメージばかりが先行していて、実際にどのように偉い人物であつたのか、そこまでは詳しく調べてみるのがなかった。それは根本的にこちらがまだ大して関心を持っていなかった証でもある。そんな不肖の孫であるから、とにもかくにも游がどのような学者であり、どのような生涯を送つたかについてある程度知るにいたつたのは、2014年3月に出版された『ある文文学者の肖像—評伝・富士川英郎』（新書館）を執筆したことが大きなきっかけとなった。この評伝は幸いにも、第30回ヨゼフ・ロゲンドルフ賞と第66回読売文学賞を受賞したが、評伝執筆にあたっては、游と英郎との関係性をどうしても取り上げる必要があつた。父・英郎はその晩年に伝記『富士川游』（平成2年、小沢書店）を執筆している。そこで英郎が游をどのようにとらえているか、どのように記述しているかを、わたしはまず探ってみることから始めたのである。そこでまず、英郎の伝記をもとに游の生涯と業績について略述しておきたい。

## 医史学者としての游

富士川游は慶応元年（1865）5月11日、安芸国沼田郡長楽寺村（現在の広島市安佐南区安古市町大字長楽寺）に生まれた。幼名を充人<sup>みつと</sup>という。後年「子長」という号を愛用したほか、若年の頃には「平氣子」など幾つかのペンネームを用いて執筆活動をしている。子供の頃から大変な読書好きで、特に歴史に大いに興味を示し、すでに旧制広島中学校在学中に「藤原秀郷論」という論文を広島の新聞に投稿、入選を果たしている。また、休日には手帳を懐にして、広島市内外の墓地を訪れ、有名人の墓誌を写すことに余念がなかったという。游の医学史研究はまずその資料の蒐集や探索から始められたのである。文明開化の大波に激しく揺れていた明治維新後の日本において、江戸時代の文化遺産の多くが惜しげもなく投げ棄てられる風潮のなかにあつて、荒廢に帰した名家の墳墓を探索したり、埋れた根本資料採集のために地方を探訪したこともあつた。昭和29年刊の『富士川游先生』（非売品）の巻末には付録として「富士川先生語録」が掲載されているが、そのなかにこんな游の談話が見出せる。

「私は明治20年頃から医書を集め出したが、その頃の話を話しても、今の人には想像もつかないくらいに苦心をしたものである。その頃は、今とは反対に欧米心酔で、何でも外国のことではなくては駄目だという迫害と、漢方排斥の潮流のために、そういう古医書を集めることは漢方を擁護するものだという迫害とがあった。買う金がないというようなことは、私の個人の問題であるが、そうではなしに、この2つの迫害がかなり強かった。私もし、官途についていたならば、或は出来なかったかもしれない。今の人のように、政府から給料をもらって、余暇で書籍を集めるのところが、民間でやったことは、賞めてもらっても差支えはなからう。ハハ……」

游が蒐集した古医書はおよそ2万冊に達したという。平安時代から江戸時代末期にいたるまでの重要な医書である。しかもそれが各科にわたって網羅され、組織的・系統的に集められている。そこにこの蒐集の特徴があるとされており、蒐集した古医書の大半は、現在京都大学付属図書館の「富士川文庫」に収められている。

游が医史学の研究を本格的に始めるのは、明治24年頃からで、37年10月に代表的な著書である『日本医学史』が刊行される。ここで注目したいのは、游が大学などの公的機関に所属することなく、あくまでも在野の学者にとどまったまま、独力で大著『日本医学史』を完成させたことである。しかも古書蒐集に熱心な游にむかって、「おまえは馬鹿か気違いか」などといった罵詈雑言を浴びせられたり、さまざまな迫害をこうむっていたにもかかわらず、である。そこに、いかなる不利な状況のなかにあっても、自分の信念をつらぬき通そうとする医史学の<sup>パイオニア</sup>開拓者としての游の偉大さがあるのではなからうか。在野にあって奮闘する游には、若い頃から土肥慶藏や呉秀三などの有力な友人たちがいたことも特記しておいてよいだろう。在野の学者だからといって、決して医学界で孤立したわけではなかったのである。土肥や呉とは志を同じくして、早くから医学史の研究に情熱を持って当たっていたからだ。また若いときから医事ジャーナリストとして活躍し、各種の医学会や児童学研究会などを次々に立ち上げており、他の医者や研究者たちとのコミュニケーション能力が抜群であったことが知られるのである。

その後、明治末期から大正年間を通じて、游の仕事や活動は医学や医史学以外の種々の領域にも及び、広範囲にわたっている。とりわけ当時の医学では説き明かせないさまざまな精神の領域への探索が目につくが、その新しい試みのひとつが明治38年4月の学術雑誌「人性」の創刊である。「人性」とはドイツ語 *der Mensch* の訳語で、普通は「人間」のこと。雑誌「人性」は、要するに人間とは何かを解明しようとする目的を持つ総合雑誌であった。つまりこの雑誌は、生物学、人類学、医学、社会衛生学、哲学、文学史等にいたる多方面な知識と学問の成果を基礎として、人間の身体及び精神の構造と機能を研究し、人間としての社会的・精神的な生き方を解明しようとする目的のもとに創刊されたのである。

これは游がドイツ留学をきっかけに真剣に思索するようになる、科学では十分に把握できぬ人間の精神の営みの追求を脱領域的に実践しようと呼びかける極めて大胆な企てであった。その際、イエーナ大学留学中に哲学者としても知られる動物学者エルンスト・ヘッケルの一元論から受けた影響が大きい。ヘッケルの一元論的世界観では、精神と身体とは同一のものであり、動物と人間の間には根本的に区別されるものは何もないことになる。それゆえ、二元論を基盤に置くキリスト教の教義とは相容れないものであった。ドイツ留学後の游の思想形成は、こころとからだ、精神と物質の問題をめぐる、これら二つを対立する二元的なものとしてではなく、一体のものとして一元的に把握するという方向でなされたのである。こうした游の思想は大正4年9月に論文「親鸞聖人」を「中央公論」誌上に発表して以来、宗教ジャーナリストとしての活動を積極的に行う晩年にいたるまで、はっきりと認められるのである。

### 心と思想——その現代的意義

游にとって、ヘッケルの一元論は、親鸞が説いた浄土真宗の教えと根本的なところでかなりの点で一致しているという。游は「身体と心は不可分であり、切り離しては語れない」と繰り返し語っているが、これはむしろ仏教の基本理念のひとつである。游がそう言ったのは、一元論を哲学として思索したからではなく、おそらく幼い頃から身に着けていた、精神と肉体を別なものとして考えられない、不可分のものであるという仏教の知のあり方が自分にとって自然な宗教的感覚であることを強調しているのではなからうか。とりわけ注目すべきなのは、游が宗教と医学との関係についての思索を深めていることである。これはほとんど稀有なことである。その代表的著作が昭和12年に出版された『医術と宗教』（平成22年に書肆心水より復刊）である。

この著作の冒頭の「緒言」で、游は19世紀の優れた臨床医フーフェランドの言葉を引いている。フーフェランドは次のように語っている。

「若し、医学が宗教になっていないならば、それは其人にとりて地球上にて最も望みのない、最も難儀な技術である。そればかりでなく、其の技術は最も軽佻浮薄なものとなり、また罪惡とならねばならぬ」

この言葉の意味は、医術が軽佻浮薄なものにならないように、かつ、罪惡とならないことを願って、宗教の心を説明することにあるのだろう。この考えは、見方によっては医術に宗教の心理的な効果を利用する方法と考えられないこともない。

一般的に言って、医術と宗教を結びつけてとらえることは、今日、かなりむずかしいのではあるまいか。もっと率直に言うならば、医術の不足を根拠の乏しい宗教的感化によって糊塗しようとしているのではないかと疑われもしよう。だが、游にとって、技術としての医学は、決して機能的・器械論的のみ取り扱われてはならないものであった。医学がいかに進歩しても、病人の治療に「心のケア」を大切にするというその原理・原則は崩してはならない、とする姿勢が游の確信であったように思われる。この考え方にもとづいて、游は病人について、次のような新しい解釈を示した。すなわちまず「病人は病みたる人間である」と定義している。ごく当たり前のように聞えるけれども、これは病んだ人間は、肉体のみならず心も冒されていると理解することである。言いかえれば、全人格が治療の対象となるのである。ここから病人の治療に「心のケア」を重視する姿勢が生まれてくるのである。「心のケア」を実践するとき、宗教的意識を持つことが大切であることを強調するのだ。高齢化がものすごい速度で進展する一方の現代において、游が考察した「医術と宗教」の問題は益々重要となっており、「心のケア」を含む医療福祉の必要性が高まっているのではなからうか。全く素人ながら、『医術と宗教』を読みながら、そんなことを考えたのである。